
俺の転生物語 inしゅごキャラ

YUM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の転生物語 i n し め ご キ ャ ラ

【Nコード】

N 5 1 7 1 Y

【作者名】

Y U M

【あらすじ】

作者の妄想によりはじまります
キャラ崩壊にご注意くださいませ

初めに（前書き）

プロローグ的な？

初めに

「うわああああああああああああああああああ
はい、いきなりのつけから大声出してすいません

「あのーどこどこでしょうか？」

おれは誰もいない空間にむかってそういった

「すいませーん誰かいないんですかー」

返事がないただの屍のようだ

「誰が屍だ！」

「うわっ！」

いきなり何もない方向から声が聞こえたのでびっくりしてしまった。「すいませんだたでしょうかと地の文を読むのやめてくれませんか？」

「私は神だ」

「へー神様ですかー」

「なんだ？ そのバカにしたような態度は？」

だって神とかいきなり言われたって厨2病患者にしか見えねえよ
でも俺は聞くことがあったのでそっちを優先した

「ここってどこなんですか？」

そうここはどこなのか

「ここはあの世とこの世の境目じゃ」

「
・
・
・
は？
」

何言つてんのあんた

「つまり俺は死んだんですかい？」

「まあそうゆうことになるな」

理不尽だ・・・

「そうお前は死んだのじゃまあ正確に言うとなしが殺したんだけど☆」

マヂカ

「マジ」

「マヂなのか？」

「マジだっつってんだろ」

「うそだろゝなんで俺が殺されなきゃなんねゝんだよゝ」

「まあまあそういうなすぐに転生さしてやるから」

ん？ 転生？

「そう、転生じゃ死んだんだから転生するのは当たり前じゃまあお前の場合例外だけど」

「例外？ どういうことだ？ 説明しろ」

「普通転生したら何らかの生き物になって人間界に戻されるんじやがお前の場合・・・」

待て待てちよつと待てそんじゃ何か？ 俺は生き物でもなくなるってのか？ そりゃないよとつつあん

「おれ・・・生きものじゃなくなるの？」

「半分あってるけど半分ちがう、お前は人間になるだが」

「だが？」

「人間界には戻れない」

「・・・は？」

何言ってるの？

「つまりお前は人間になって2次元の住人になるんだよ」

「まじで？」

おれはけっこうニコニコしながらそう言った

「なんか嬉しそうではないか？」

それで今回は特別にどこに行くかお前に決めさしてやろうと思ってな」

「マジですか？やったーじゃあじゃあ「しゅごキャラ！」の世界に行きたいです！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・何言ってるのあんた？男じゃよな？」

「はい俺は真正銘男ですが？」

「男が少女漫画に行きたいって・・・・はははははははははははは！」

「このくそジジイ見えないからって調子に乗んなよ！」

くそく少女マンガのどこが悪いんだ

「わかったわかったじゃあ「しゅごキャラ！」じゃな？」

「ああそうだ」

「じゃあ次は名前を決めるのじゃ」

「はい？名前？名前って俺の？」

「あたりまえじゃまさかお前本名で入る気だったのか？人さまの作品に入るんだからそれなりにかっこいい名前にしろよ」

うーんたしかにそうだな

「じゃあ神星矢^{かみじょうしおん}遠で」

「ださっ」

「うるせーよこれでも作者が1週間かけて考えた渾身の名前だぞ」

天の声「どーせ俺はネーミングセンス悪いですよ」

「作者すねちゃったじゃないか！どうすんだ俺の生まれ変わりもおじちゃんになるんだぞ！？」

「はいはいその名前でもいいんじゃない？」

「あっ・・やっぱり矢遠^{しおん}だけでいいや」

「なぜじゃ？」

まあそれはのちほどね？

「まあいいじゃあその名前でもいいんじゃない？」

初めに（後書き）

さて2次創作は初めてですのであたたたくみまもってくださいまし
かってにQ&A

Q 主人公はあむですか？ 矢遠ですか？

A 一応矢遠の予定です

第1話（前書き）

はじまりました

第1話

俺は日奈森亜夢の家の前に倒れていたらしい

俺は転生して2次元に来たらしい

世界はアニメの中のような見た目で俺も2次元の住人みたいなイラ
ストらしい

そして俺は男ではなく女になったらしい

らしいというのはいま俺は記憶がないからだ

その内この事も忘れるらしい

まぶしいそろそろこの夢もおわるのか……

視点ー矢遠ー

「だめだこれ以上歩けない」
そう言っ
て俺は倒れた

「ハア……ハア……」
だめだ意識が……

「だれこの子……」
ん？だれだ？だれかいるのか？女の……子……か？
「大丈夫？こんなところで倒れてると車にひかれるよ？」

そんなこと言うなら助けてくれよ

こっちは原因不明の苦痛で動けないんだ・・・

「大丈夫?・・・っ!？」

なんだ?急に女の子がびっくりして

おいどこに行くんだ?たすけてくれよ

家の中に入って行ってしまった

と思ったらこんどは誰かと一緒に出てきたぞ?

何をそんなにあわてている?

「すいません救急車をお願いします。はい、頭から血が出てて・・・はい場所は」

もう駄目だ・・・俺は死ぬのか?・・・

第一話「しゅごたま?なにそれおいしいの?」

気がつくと俺はベットの上で寝ていた

「ここはどこだ?」

そう言って起き上ると

「あっ目が覚めた!よかった」

そんなことを言って俺の足になだれ込む一人の女の子

髪の色はピンク

髪にはばってん模様のゴムがついている

「あの・・・どなたでしょうか?」

「ああごめん私は日奈森あむ

あんた・・・名前は?」

名前?ああ思い出せない俺の名前・・・あ

「俺の名前は矢遠しおんですよ」

「俺?」

「え?なにか失礼なこといいました?すいません」

「いやいやそうじゃなくて・・・あんた女の子でしょ?」

「え？そうなんですか？じゃあ私っていったほうがいいんでしょうか？」

俺はそう聞いた

「ん〜まあ言いやすいほうでいいんじゃない？別にあたしはどっちでもいいけどあんたの呼び方なんて」

女の子・日奈森あむ？はそう俺に冷たく言った

「やさしいんですね日奈森さんは」

そう俺はちよつとからかうように言った
しかし

「べつ別にやさしいとかそんなの言われたくて言ったんじゃないし」

「ふふっ素直じゃないですね」

「そう？まあ実際そうなんだけどね

家でも学校でも外キヤラ全開で・・・ごめん初めて会った子に何言
ってんだろあたし」

そういつて日奈森さんはちよつと暗い顔をしてしまった

「あむちゃ〜んあの子起きた〜？」

そういつて誰か女性が入ってきた

って言うかここはどこなんだろう

「なんだ起きてたの？もうあむちゃん起きたんならいつてよ」

「ごめんつい話してたら忘れてた」

「あのすいませんここはどこなんでしょうか？」

そう俺が言うのと空気が冷たくなつたなにか聞いてはいけないことを
聞いてしまったのだろうか

「ここは・・・病院よあなたを見つけたからつれてきたの」

「俺を見つけたから？どういうことです？」

俺は何も覚えていない生まれてから今までの事すべて

「あなた血まみれで倒れてたのよ？お医者さんが言うには記憶喪失
って・・・」

「きおく・・・そうしつ？」

だから俺は何も覚えてないのか

「とりあえずあなた名前は？」

「俺の名前は・・・矢遠と言います」

「矢遠ちゃんかくよしこれから記憶が戻るまで家で預かってあげるわ」

「ええっ?! ママ? 何言ってるの?」

「だから矢遠ちゃんを家で預かるって言ったのよ? 当然パパは許してくれたわよ? 女の子だもん」

「どういうことなんだ? じゃあもし俺が男だとなっていたんだ?」

「じゃあ今日から矢遠ちゃんは日奈森矢遠ひなもりしおんとなのってもらおうから、わかった?」

俺に言っているのか?

「はい俺は問題ありません、親の事も思い出せませんし助かります!」

そう言っただけ俺は日奈森家の1員となった

「今日からここがあなたの家よ」

けっこうりっぱな家だった扉を開けて中に入ってみるとクラッカーが鳴った

「ようこそ日奈森家へー」

だれだ? この人は

「もうパパ何やってんの?」

パパじゃあこの人が俺のお父さんになるのかな?

「あむちゃん今日はぱぱの娘が一人増えたんだぞ? しかもかわいい!」

あーそーそーそーそーそーそーそーそーそーそーそーそー

「矢遠ちゃんだったかな?」

「はっハイ・・・」

どんなテンションで話せばいいんだろう?

「ちよっとパパ? もう夕方なんだけど」

近所迷惑になってるし」

日奈森さんちよつと怖いんですけど・・・ん？俺も日奈森なら亜夢さんって言った方がいいのかな？

「ごめんよあむちゃん」

俺はちよつと笑ってしまった

「くすっ」

その瞬間緊張がほどけたのか俺は気を失ってしまった・・・

2話に続く

第1話（後書き）

読んでくださいました方々これからもこの駄作に付き合ってください
（．．．）

第2話（前書き）

なんかさっきアクセス見たら444になってた怖

第2話

視点→矢遠→

ここはどこだ？

て言うかなんかい言う気だ「ここはどこだ」って

そんなことを考えていたら

ドアがノックされた

「しおんちゃん

はいるわよ」

「はい。どうぞ」

そう俺は答えたすると一人の女性が入ってきた

「日奈森家に住む以上学校に行ってもらいます。

というわけでこれ着てみて」

その人が言ったこれとは聖夜小学校の女子用の制服だった

「それを俺が着るんですか？」

そうなぜか女物の服を着るのは抵抗があるなぜだ

「そうよ？明日からしおんちゃんはこれを着て学校に行ってもらいます」

「わかりましたじゃあ着替えますのでひとりにさせ・・・」

次の瞬間お母さんは無理やり俺に服を着せようとした

「まあいいじゃないの女同士なんだから♪」

「よ、よくありませんよ！あひゃあつどこ触ってるんですか？！」
そして・・・

「にあってるじゃない」

俺はついに女子用の制服を着てしまった・・・なんだこの敗北感

「矢遠しおんはいるよ．．．なにそのかつこ」
ガーン

「亜夢さんに見られた．．．．」
俺は何だか悔しくなっちゃったな〜ぜ〜
まああしたからこれで学校行くんだからどうせみられるけど
とか思ってるよ

「にあってるじゃん
ああそうだあたしの輪ゴム貸してあげるから髪くくってみなよ♪」

「輪ゴムってばってん模様のアレですか？」

「いいじゃない似合うとおもうわ〜」

「遠慮しておきます」

「「だめ」」

なんでえええええ

〜数分後〜

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

沈黙．．．

なぜみんな黙っちゃったのかと言うと無理やりポニーテールにされた俺が鏡を見てかわいすぎて恥ずかしくなって泣いちゃったからです、はい

「．．．．．なんか．．．．．ごめん」

「べつに．．．．．」

結局その日おれは部屋から出ることができなかったお父さんに見つかるとどうなるかわかったもんじゃない

第2話「俺は男子の特権ですか？」

翌日

俺はなんか気にいったバツ印の輪ゴムで髪をくくって学校に行く記憶がなくなっても生活できなくなるわけじゃない神様もわかってくれている……ん？神様って誰だったっけ
まいっか☆

「矢張り学校いくよ」

亜夢さんがそういうので俺は制服に着替えて学校に行く今日から学校生活か！勉強おいつかないと

「はいいいまいきまゝす」

そう言って下に降りる

もう朝食をすました亜夢さんが待っていた

「すいませんすぐに食べますので」

「いいよゆっくり食べな」

相変わらずやさしい人だ

朝食を食べ終わった俺は学校に行く

行く途中細道で誰かを見つけた

「カツアゲですかね？」

「まったく……行くよ？」

亜夢さんはそう言ってカツアゲされている子のほうに近づいた

「じゃまとうれないんですけど」

「へ？」

そこから亜夢さんはよくわからない伝説を言われた後

「通行の邪魔なのはあんたも同じ」

そう言って学校に行ってしまう追いかけないと！道分かんない！

「待ってください亜夢さん！」

「ああごめんごめんおいていっちゃった？あとべつに亜夢でいいよ？」

「そうですか？じゃあこれからはそう言います」

そんな話をしながら学校に行く

俺は転校生扱いなので途中で別れて職員室に行く

視点→亜夢→

またクラスで浮いてしまった
もういろいろ省く

視点→矢遠→

「よし最初の挨拶は肝心だちゃんと言えるようにしてないと」
とか言ってるともう先生に呼ばれてしまった

「今日からみんなと同じクラスになる矢遠ちゃんださぁみんなにあ
いさつして？」

そう言われたので俺は

「始めまして俺は今日からこのクラスでお世話になる日奈森矢遠と
います

一応性別は女です

あと記憶喪失ですのでいろいろおしえてくださいね？」

俺はそう笑顔を満開に咲かせそうだったすると

「俺っ娘？」

「記憶喪失だって」

「日奈森って言わなかったか？」

あう→余計なことを言いすぎたかな？

「先生？俺の席はどこですか？」

「ああキミの席は日奈森あむさんの隣だよほらあそこ」

「ありがとうございます」

そう言って俺はあむの席の隣まで行く

「まあがんばって・・・」

「・・・はい」

放課後

「あむ一緒にかえろ」

「あむ？呼び捨てかよ」

「何だあいつなれなれしい奴だ」

あっやばい泣きそう・・・

「そうだねかえろっか？」

「・・・はいっ！」

もう早く帰らないと転校そうそうひきこもる伝説の俺っ娘記憶喪失者になりそうだ

夕方

「あなたの後ろにしゅごれいがいるわ！」

なんだこの人は

いろいろはしります

夜

視点→亜夢→

「しゅご霊様以下略」

視点→矢遠→

しゅご霊・・・か

そんなことを考えながら俺はベットに寝そべっていた

「元気で明るい俺」

「クールでかっこいい俺」

「やさしくてみんなを助けれる俺」

「どれか1つでもいいからかなってほしいもんだな」

3
話
に
続
く

第2話（後書き）

ああいきなりひきこもるとかそんなルートはないのでご安心をこの
小説書くの楽しいしね

第3話（前書き）

はじまります

第3話

朝

視点↳矢遠↳

亜夢

「「たまごって」」

視点↳矢遠↳

これはちよつと人には言えないいろんなアレなことのひとつってやつですね

男のこにはわからない女子だけの・・・みたいな

赤紫・青紫・深緑それぞれ・・・？だ・・・

「矢遠学校いこ」

「は〜い」

俺はいつも道理学校に行く

校門のところで妙にきらきらしてる人たちを発見した

ガーディアンのはとりただせ君と同じくガーディアンのおじさきなでしこだ漢字分かんないからひらがなで書きます
どうでもいいけどケーブダサくない？

そんなこと考えながら学校に入って行くと

肩を掴まれた

「あの・・・キミたち・・・」

「「・・・」」

なんか回りが騒がしくなってきた。……どうしよ

「ようがないならきやすく話しかけないで、おちびさん」

亜夢かつこいーでもあむもさつきまでただせ君みながらきらきらしてたのね

「いこ矢遠」

「あ、はい！」

ちよつと歩いて周りの人から見えなくなったとたん

「あの・・亜夢？大丈夫？」

いきなり落ち込みだしてしまった

まちがないあのこたち

だ」

第3話「キャラもっててもやっぱ俺TUEEEEEEE」
EEEEEEには勝てない」

ん？ただせ君がなんか言ってたけど

まあいかなんかよくわかんない集会が始まった

ガーディアンがなんかついてるけど何も頭に入らない亜夢……さつきからずっと落ち込んでる

そしてなぜかばんを持っている？

次の瞬間！

「あなたが好きです王子様！」

あむが急に立ち上がって叫んだ

「あ・あむ？」

「^?」

あ、亜夢が真っ赤になってるかわい
いやいやそんなこと言ってる場合じや

あ逃げた

ガーディアンが追いかけてる駄目だ

「俺に任せて集会を続けてくださいっ！」

俺は全校生徒に向かってそう叫んだあと亜夢を追いかけた
幸い俺もかばんを持つてゐるからこのまま帰れる
えゝと亜夢はつとあおちた

へ？

「亜夢！」

俺が叫んだ瞬間亜夢が穴から出てきて飛んだ

「……」

なんかギャーギャーいつてる元気そうでよかった

しかしなぜ浮いてるんだ？

そして何だあの高校生ぐらいの男は

くそこからじゃ聞こえづらい

＜飛べない子は飛べちゃう子にキャラチェンジ？＞

「え？」

＜ほっぷ？すてっぷ？じゃんぷ？＞

俺の手と足に赤紫の羽が付いて体が宙に浮いた

なんだこれはどんな亜夢の方に近づいてるとどうとう電線の上の亜夢のところまで行くことができた

「え？矢遠？」

「ん？こいつもキャラもちか？」

なんだこの男キャラ持ち？何だそれ

「矢遠私の声が聞こえるか？」

「ん？おわっなんだこのちっこいの」

「ちっこいのって私はおまえが願ったから出てきてやったんだぞ？」

もちっとそのへんをだなく」

「そんなことはどうでもいいオマエハダレナンダニンゲンジャナイ」

「……私は……ラヴァル……しゅごキャラだ」

「いつまで話してんだっ」

「ひっ！」

男がいきなり近づいてきて電線が切れたああやっぱり俺はしぬんだな

「ホーリークラウン！」

なにか柔らかいものに直撃しておれたちは死ななかった

「ただせ君？」

あむがただせ君にお姫様だっこされて顔が真っ赤になってるそこは

物語の進行からして俺じゃないの？

「ちっ！この量は俺一人じゃ無理か」

男がそう言うといきなり猫の爪が出てきた

その爪が消えたときにその男はいなかった

あむとただせ君がなんかやってただせ君が帰って俺とあむは家に帰った

次の日

俺たちのクラスになでしこさんがやってきた俺とあむにお茶会の招待状を渡して出て行ってしまった

放課後

「ここがロイヤルガーデンか？」

何ともいえぬばかりでかさ

中に入ると

ガーディアンメンバーがいた

しゅごキアラの事聞かなくてはいけない

「ようこそロイヤルガーデンへ」

いらつとくるいいかただな

「ぼくは君たちと同じで来年から5年生ほとりただせこっちはしゅごキアラのキセキ」

「・・・」

返事がないただの屍のようだ

「私も来年から5年生のふじさきなでしここっちはてまり」

「はいな♪」

「あたしは来年から4年生のゆいきややこっちはぺぺたん♪」

「ちゅ」

「おれは今度から6年の相馬空海だこっちはダイチ」

「よろしくな」

「えっとあたしは・・・」

「日奈森あむちゃんでしょ？ほんとに人みしりなのね」

「あとおぼけがにがてなんだろう？」

なぜここまで個人情報だだもれなんだ？

「だって私たちは個人情報の管理も任されているんだから」

「地の文をよまれた！？」

それってこの方が個人情報流通するんじゃないや・

「じゃあとりあえず俺は日奈森矢遠ひなもりしおんです。こっちがラヴァルとリチュアです」

「……………」

お前らも屍かよ…………

リチュアは俺の？の卵から生まれたしゅごキャラ？だあむもさっきの美術の時ミキが生まれた

「しゅごキャラっていうのはみんなのなりたい自分以下略」

「へー」

全く理解できん

「つまりもう一人の俺みたいなもの？」

「まあそんなかんじじゃねえの？」

「で今日俺たちが呼ばれたのはなぜですか？」

「ガーディアンに引き入れるためにきまってんじゃないやねえか」

空海……声がかっこいい

「日奈森さんたちガーディアンに入ってくれる？」

んん

「「やだ」」

「「「え？」」」

「なんでなんで?! ガーディアンになればいろんな特権てんこ盛りなのに」

「「だってあのケープきたくないから」

「・・・」

「ケープってそれだけ？」

「だけじゃないしあたしの美的センスに反してるし！」

「・・・ぷっはははははははははははおもしれえなーお前らら？俺も入ってるんですか？」

「ごーかく」

「「いやだからはいんないし」」

「どうしても：ダメ？」

ただせ君あむにはきいても俺にはその攻撃は通用しない！

「とにかくダメ！」

ああ、あむにげちゃった

追いかけては道をよく覚えていない！帰れなくなってしまっ

「ガーディアンねー考えとくよじゃあバイバイ！」

そういつて俺はあむを追いかける

次の日

「明日から春休みです宿題がないからって遊びすぎないように」
春休み・・・俺いきなり5年生になっちゃうよ

放課後

「あゝあたしも誰かと遊ぶ約束ぐらいしたら良かったな」

「ははは・・・」

「よんだ？」

「うわっ！」

あむはいきなり出てきたなでしこに驚いて尻もちをついてしまった

「あむ・・・女の子があしがくがく言わすのはどうかと・・・」

アレ聞こえてないのかな？

なんかイベントが始まった

ただせ君隠し撮り・・・最低だ

「買収なんてバカにすんな！」

「そうだそうだ！」

「つられかけてたくせに」

ミキ

的確なつつこみありがとう

ん？ただせ君の誕生日にお菓子作り？

「むりむりあたし家庭科ダメ最悪！」

へーこれはまた一つ面白いことを知れた

なんか30分後にまたここであうらしい暇だから付いていこうかな

30分後

俺ー制服ー

あむーエプロンー

なでしこーエプロンー

なんかタルトを作ることになったちゃったよ

「また面倒になったな矢遠よ」

ラヴアルがそう言った

「いやここで女の子スキル全開にしてアピイイイイルタアアア
アアアイムと行くのはどうだ？」

リチュア・・・うざったい

原作からしてこの二人はマークを交換するべきだな、うん・・・原作？

「3つ目の卵どんな奴が生まれるのやら」

「とりあえず俺は見学してるよ」

「まったくヘタレがそんなことでは空海に振り向いてもらえんぞ？」

「そんなこと言ってみろ」

オレアクサムヲムツコロス！」

タルト作りの途中なでしこがどこかに行った

「あむがんばれ」

「ひとごとかきさま」

うるさいぞラヴァル

ん？あむのたまご・・・あ

こないだの男が来た

「ネコミミコスプレ変態男！」

あむがなんか叫んでる

あゝなんかはしよる

タルト壊れちゃった

ちなみにスウが生まれましたはしよる力は恐ろしい

俺の三つ目はまだかな

「これだけあまってればタルトは無理でもほかのものができますよ
お」

俺の3つ目の卵が帰った

「俺はナチュラルと言います」

第4話につづく

第3話（後書き）

感想をくれるとうれしい…かな？

第4話（前書き）

とりあえず投稿してみました
なんとか1000アクセス行きました

第4話

「俺はナチュルと言います」

俺の3つ目の卵が帰った

「なんか話しがぶっ飛びすぎなんですけど」

「矢遠キャラチェンジだ」

ナチュル・・・いきなり出てきてそりゃないよ

「はいはいわかりました・・・キャラチェンジ！」

はしよる

クッキー完成

「はやっ！」

夕方

「あとはラッピングをして完成ですね」

「うん」

俺たちは家に帰るとすぐ部屋に入ってラッピングにかかった

「メッセーじカードも入れちゃおう」

ちなみにリボンは赤に決定した

なんか変なこと書かされてる気がするんだけど

あ・・・

メッセーじカードを捨てちゃった

あゝほかのことかくんですか

さっきのをそのまま入れたらいろいろと・・・ね？
え？内容？それは単行本買うなりなんなり確認してください

第4話「叶う願いと敵わないお酒」

次の日

今俺たちはただせ君の家の前に来ています

「大きいえですね・・・」

「あとは王子にこれを渡すだけ・・・渡す？」

ん？やっと気付いた？そうあむはこれをどうやって渡すのやら

「渡しにくかったら俺渡しておきましょうか？」

「え？いいの？」

「駄目よあむちゃんじぶんでわたさないと」

「あたしはこれでいいの！じゃあ矢遠頼むよ」

「了解！」

「ちょっと待って？」

「はい？」

「これ食べてみて？はいあゝん」

「えっ?!いきなり何すんですか？なでしこさん・・・あゝん
パクッ」

けっこううまいなチョコレート？なぜに今

「じゃあ渡してきます」

そう言っただけ俺はただせ君の家の前に行ってインターホンを押す

「矢遠に何食べさせたの？」

「チョコレートボンボンよ？かなりアルコール濃度の高いやつ？」

「・・・・・・・・・・・・は？それはいろいろまずいのでは？」

「ただせ君これ・・・グッ」

「大丈夫？日奈森さん！？」

なんか急にふわふわしだした・・・意識が・・・

「だっ大丈夫！これあむが作ったクッキーはいわたしとて言われたから・・・じゃ！」

そう言って俺は逃げるもうそれは全力疾走？

「はぁ・・・ふわ・・・はう・・・な・・・何食べましたんですか？」

我ながら息切れをすると喘ぎみたいになっちゃうから気分が・・・

「チョコレートボ以下略」

なんでそんなもの食べましたんですか？

「グアッ！」

ドクン！ドクン！！

「大丈夫？矢遠」

「はぁ・・・はぁ・・・あっ？！」

その瞬間俺の何かが切れたのか

あむに近寄り亜夢のほほに手をやり唇に俺の唇を覆いかぶせた
そして

「ぶぁっ・・・あむ・・・俺と

しろうぜ？」

アレ？ナンダカアムガオビエテルオレハイッタイナニヲシテナニヲ
イッタンダ？

「へっ変態！！！！」

バシーン

やっぱりお決まりでしたか~~~~~

俺はそのまま意識を失った

第4話（後書き）

作者は遊戯王大好きですよ
はい・・・矢遠が何言ったかはご自由に・・・

第5話（前書き）

何か短くてすみません

ハンプティーロック譲り受ける

なぜか俺が・・・

蛇足になるかもだが俺は女だが水色のケープを着ているピンクはちよつと・・・

あむはけーぷを着ないようだ

俺となでしこと亜夢のクラスは同じだ

早速ガーディアンの仕事で×たまさがしになった

そっこーで見つけた

俺とあむと空海はキャラチェンジで対抗しようとしたが

空海はキャラチェンジに成功したが俺とあむは

あむはランの俺はラヴァルの姿になってしまった

「なんじゃこりゃあ?!」

「まさか・・・キャラなり?!」

第5話（後書き）

気づいてるかもしれませんがバグかなんかで4話目がきれてしまったので書きなおしました

この駄作をよんでくださいました皆様大変ご迷惑をおかけしました
――（・・）――

キャラ紹介

かみじょうしおん
神星矢遠作者が中1（今は中2）の時に考えた厨2病キャラ

男

身長…140cm

体重…32kg

性格…変態

日奈森矢遠

女

髪型…ポニーテール又は短髪

髪色…白

しゅごキャラ

ラヴァル・リチュア・ナチュル

身長…128cm

キャラなり

ストリートフラッシュザハート（ラヴァル）

ストリートフラッシュザスピード（リチュア）

ストリートフラッシュザクロバー（ナチュル）

ラヴァル

女

特徴

左目が赤紫でその下に血の涙みたいな線がはいっている

リチュア

女

特徴

ラヴァルの青紫版

ナチュル

男

ラヴァルの深緑版

キャラ紹介（後書き）

読んだ方はなるべく感想を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5171y/>

俺の転生物語 inしゅごキャラ

2011年11月16日10時34分発行